

誰が誰になぜ言っているのかに着目した絵本の展開の研究 — 『あさになったのでまどをあけますよ』(荒井良二)を手がかりとして—

前田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2021年5月25日受付、2021年7月14日受理)

要 旨

荒井良二作の絵本『あさになったのでまどをあけますよ』(偕成社、2011年刊)は、題名の通り、朝になったので窓を開ける、いろんな所に住む子どもが次々に出てきて、そこから何が見えるかを述べ、だから「ここが好き」と言う。こんな場所からはこんな景色が見えてくるのかと思える美しいところが目の前に開けてくる。なるほどこれは窓を開けたくなるはずだと思えてくるものである。しかし、へたをすると、それだけのことに思われて、終わってしまいそうである。特に話の展開があるわけでもなく、おもしろくないと評価されかねない。しかし、注意してよむと、途中で二度「君の町は晴れているかな?」という言葉がはさまれている。どんな子に語りかけているのか、なぜこう語りかけるのか気になり始める。そして、かぎかつこがつけられておらず、地の文と会話文が書き分けられていないが、それぞれの場面で誰が言っているのかをはっきりさせて読もうとすると、この絵本の構成が見えてくる。その上で、足立茂美氏の解釈を手がかりにして、この絵本の書かれた意図を明らかにしようとしたものである。

キーワード：絵本 登場人物 語り手、場面構成、『あさになったのでまどをあけますよ』

はじめに—本研究の目的・方法,資料—

本研究の目的は、荒井良二作の絵本『あさになったのでまどをあけますよ』を取り上げて、見開き一面に描かれた絵と本文とを照らし合わせて、各場面の発言を①誰が言っているのか、②誰に対して言っているのか、③なぜ言うのかに着目して、本書の展開とその意図をあきらかにすることである。そのために、見開き一面の上欄に掲げられた発言を、誰がどんな思いで言っているのか、絵に何が書かれているのかを解明し、それが次にはどう進んでいくのかを探っていくこととした。そして、場面展開から書き手の意図に及ぶ際には、先行研究として足立茂美氏の『絵本で出会った子どもたち』(今井出版)の解釈を忠実に生かして、この絵本が書かれた真意に迫るようにした。そして、読み聞かせにはどのように生かすべきかも探っていく。

一 『あさになったのでまどをあけますよ』の概要

『あさになったのでまどをあけますよ』は、荒井良二氏が絵も文章も書かれたもので、2011年に偕成社から出版されている。本文は32ページあり、字も絵筆で記されている。かぎかつこがつけられておらず、それぞれの場面で文章と絵を照らし合わせながら、地の文か会話文かをそのつど判断して読んでいく必要がある。この絵本は、第59回産経児童出版文化賞大賞を受賞し、第5回MOE絵本屋さん大賞2012 第1位に輝き、「この絵本が好き!2012年版」国内絵本第1位にも選ばれていると、帯に書かれている。絵が美しく、評価も高かったようである。絵本の帯には、「なにげない日々のくりかえしの中にある、たしかな希望、生きることの喜び」とある。なぜこのように言えるかも、最後に考えてみたい。

二 第一部(第一場面から第四場面まで)における展開

論述の便宜上、表表紙・中表紙も、ここに含めることとする。

1 表表紙において

窓のカーテンの手前に、少し斜めに三つの花の鉢が置かれている。右手前にニチニチソウとみられる草花が、少し赤い花びらをのぞかせている。真ん中の白い背の高い花もニチニチソウのようである。手前が赤い花びらの花芯が白であるのに、中央のニチニチソウは、反対に芯のところだけが桃色に染まっていて白さを

一層きわたらせている。その後ろに咲く三つ目の鉢は、背は低い赤いケイトウのようで、ひとところにかたまって咲いていて、こじんまりと存在を主張している。鉢植えの花々をきれいに咲かせるために、日ごろから土を入れたり、石を並べて水はけを良くしたりしているのであろうか。三つの鉢の向こうにスコップが、ブックカバーの折り返しには、鉢より手前にじょうろがある。外が明るくなっているらしく、カーテンを通して光が入ってきているようである。この上から降りたカーテンのところに、縦長の字で題「あさになったのでまどをあけますよ」が書かれている。ニチニチソウもケイトウも高温で日照を好む花らしく、早く日当たりのよい、風通しもよい場になるのを待ち望んでいることであろう。なお、三つの花の鉢からは、実景ではあるまいが、明るいカーテンの鮮やかな色彩に感化されたのか、陰になる部分にもさわやかな色が流れ出したように描かれている。現実以上に美しい屋内になっている。

2 中表紙（1ページ）において

ここでは、表表紙で美しく彩られたカーテンの奥にあるレース状のカーテンだけが上から垂れており、中央から両方に開いて窓をあけんばかりになっている。表表紙と結びつけて考えれば、三つの花の鉢を別の所に動かした状態になっているのである。次の見開きからは、いよいよ窓が開けられることになる。

3 山すそに住んでいる子どもが窓をあけ、その子から見える景色がさわやかに描かれる（2-5ページ）

手書きされた「あさになったのでまどをあけますよ」とある見開き一面には、山すそに家々がぼつりぼつりとある一軒家の開き窓を、いっばいに開く男の子が描かれている。手前の山の尾根、背後の山、向こうの山が連なる連峰の一角らしい。それらの緑の濃い山々の尾根に光が差してきているようで、確かにこういうところに住んでいれば、朝も日の出とともに窓をあけ、新鮮な外気を存分に家の中に通したいと思うだろうなあと感じられるものである。家には他に誰がいるのかは判然としない。どこまで自立的に判断しているのかもわからない。しかし、この子の表情から見れば、やはり存分に開き窓をあける嬉しさを体中に味わっているから、初めは保護者に勧められたにしても、徐々にその快さを実感するようになり、自分の方から開き窓を開く役になりたくなり、近頃は望んで開けるようになったものと推察される。窓を開けるといふ点から見れば、極めて恵まれた環境にあるわけである。

続く見開きの雲の上には、「やまはやっぱりここにい て きはやっぱりここにいる だからぼくはここがすき」とある。先の一面で開き窓をあけた男の子の目に映った景色が、おおむねこの発した言葉の通りに、広がっている。眼前に盆地にできた左手から右手に向かって流れる川に沿って流れも激しく泡立ち盛り上がりるところから、だんだん川幅も広がり穏やかになるところまで続いている。その両側に田畑があり、家々も重ならない程度にあちらこちらに見えている。当然、盆地の向こう側に小高い山がいくつか見える。太陽の日差しが十分に届き、黄色や黄緑色に見えるところが多い。男の子が住んでいる山ほど高くはなく、白い雲もたなびき、遠くの連山まで見渡せる。空の青さもすっかり視野に入れる余地がある。山と山との間にも小川ができていて、盆地まで流れ込んでいる。田畑にも水は十分ありそうである。画面の中央を流れる川には橋が架かっていて、川を渡って畑仕事にも行けるようになっている。男の子の家の前まで続く道もあるようである。この手前の道の近くにはかなり背の高い木がそびえていて、川向こうの山と対峙しているようにも見える。少なくとも、この男の子には向こうの山々と並んで誇らしいのがこの木だったようである。それで、「やまはやっぱりここにい て きはやっぱりここにい て」これらがあるからこそ「だからぼくはここがすき」と胸を張って言えるのである。この子は家の窓からこのような光景が見えることを嬉しく思っているのである。

この画面を見つめる幼児には、年齢に近い子どもが率先して「あさになったのでまどをあけますよ」ということも、それを実行することも驚きであり、窓をあけて見える景色が好きだから、「ここがすき」と宣言することにも目を丸くしよう。しかし、緑に囲まれた住まいから、朝開き窓を開け放つことは気持ちよさそうであり、自分もこんな所に住んでいたら、確かに窓をあけたくなると共感するかもしれない。

4 都会のビルの最上階に住む女の子が窓をあけて、町の様子が好きという（6-9ページ）

次の見開き一面には、高いビルの最上階でカーテンを開ける女の子が登場して、「あさになったので ま

どをあけますよ」と言う。あまり高すぎ、しかもさまざまな高さのビルが、不規則に伸びていて、ビルの下の方は見えない。地上が見えるのが、断片的に四、五カ所しか見えないほどである。その地上には、おもちゃのように小さい自動車がずらっと一列に並んでいる。立ち並んだビルのでっぺんはとがった形が何か所もあるが、全く同じものは見られない。雑然としており、多様である。ビルの側面も縦横の長さと言い、宣伝広告の有無と言い、色といい、窓の形といい、やたらに多岐にわたっている。

ほとんど我を忘れそうになるほどの混雑ぶりにも見えたが、女の子のいるビルの方から、通りがどう続いているかに着目して見下ろすと、この一角、隣の一角、左側の一角と、ビルはまとまりをもって計画的にすぎ間なく作られていることがわかり、人も車も秩序をもって動いていることが見えてくる。建物はやたらに大きいばかりで、どこにもほっと一息つけるところはなさそうにも見えるが、ビルの屋上が噴水の出る憩いの場になっているところもあり、遊び場になっているところもある。ビルもあざやかな色で目を引き付けるように塗られている。女の子の言葉では、「まちは やっぱり にぎやかで/みんな やっぱり いそいでいる/だから わたしは ここがすき」とある。「にぎやか」なことは、人の多い証で、どことなく心強いものなのである。誰もが「いそいでる」ことは外にいる人からは、町の一番の欠陥のようにも見られるが、急がざるを得ない事情がわかるものには、そんな中で少しでも爽り多い日々にしようといろんなが努めていることに共感を覚え、連帯感も湧くのであろう。ここが私の町なのだと思うと、建物の赤く彩られているのにも、人工的に飾られている場所にも、人波が切れないところにもいとしきをおぼえ、「だからわたしはここがすき」とはっきり言えるようである。

読み聞かせを聞く幼児がどこでこの絵本を見聞きするかに着目すると、前の山すそで開き窓を開ける子よりも、都会でビルの窓を開ける方が多かろう。それゆえ、多くの幼児が私のいる場所に近いと見なして、わかると思えるかもしれないのである。

5 川下の家で双子の兄弟が窓を開け、河口の広々とした光景を見てここが好きという(10-13ページ)
三カ所目の子どもがいる場は、場面も大きく変わって左手の小山がなだらかに下りてきて、右手のさらに平べったい丘と交わり、そこが道路となって右前方から左手前まで斜めに伸びている。一カ所目のこんもりした山の中とは明らかにちがってきている。この光景の小山の下に二階建ての建物があり、上(二階)の窓を双子の男子が窓を開けている。二階の方が窓を開けると、高いだけに遠くの景色まで見えて楽しいのだろうか。二人はカーテンを止める行動まで一致して行っているらしく、二人の腕が二本、左に、右にとまっすぐのびて、体を含めて対照的になっているのが楽しい。ここがどこかすぐにはわからないが、右手にボートを持ってきて、止めており、海か川かに近いところだろうと推測がつく。わざわざ二階の窓を開けに来ているのも、下の階からは見えないものがあるを知っているためであろう。道路の一番手前にはトラックが走っているのも、道の先には港湾や港など、物流の拠点があるためかもしれない。ここにもまた、「あぎになったのでまどをあけますよ」の言葉が掲げられている。ここでも開ける前にこう言って開けたのだろうか。二人が声をそろえて言えば、窓を開く時の気持ちよさもひとしおであろう。

この建物の二階からは何が見えるのかと期待して、次の見開きを開けると、かなり大きな川下の平地ならではのゆったりした景色が広がっている。「かわは やっぱり ながれていて/さかなは きつと はねていて/だからぼくらは ここがすき」と言っている。良い天気らしく、大河は白い雲と青い空を映している。しかし、画面に見える雲は、川向こうの大部分を覆い、青い空はほんの少ししか出ていないのに、川面に移る雲はほんの少ししか見えず、青い空の方が大部分である。この実際に見える光景と水面に映る場所との違いが、この河の広さを端的に物語っている。そして、この川の美しさは、この完璧とも見える景色が一瞬もとどまることなく「流れて」動いていること、近くに行かないと見えないが、僕らが見ていようといまいと「さかな」が「はねてい」るにきまっていることにある。川は生きている。そういう川が窓を開ければいつでも眺められるところにおれるから、「ぼくらはここが好き」と、胸を張って言えるようである。この大河は、ぼくらが目をつぶろうと、ぼくらの脳裏の真ん中に堂々とゆるぎなく流れている。こういう気持ちが湧くのであろう。

6 語り手が読者に問いかける（14-15ページ）

続く見開き一面は、どこの景色とも言い難い。中央にでんと緑の濃い大きな山があつて、ふもとにこじんまりとした村か町かがある。農家の女性がしょいこ（迫いこ）を背負って畑に行く姿もあれば、畑にハウス栽培をしているところもある。他方、車やトラックもあり、建物もかなりある。注目すべきは、「名菓最中」の字が見え、神社の鳥居が見えることである。ここまでここが日本だと明確に感じさせるところもなかったのである。そこに、「きみのまちは はれてるかな？」と拳がっているところから見ると、本文に入ってから山のふもとの男の子、町のビルに住む女の子、大きな川の河口近くに住む双子の兄弟が窓を開けていったことをふまえて、ここでは、三つの地点での子どもの声を耳にして（もしくは想像して）、語り手が直接絵本の読み聞かせを聞いている「きみ」（日本に住んでいる一人一人の聞き手である君）に直接語りかけた言葉だと推察されてくる。なぜ、「きみのまちは はれているかな？」と聞きたくなつたのであろうか。

語り手は、この絵本の最初から、幼児たちの予想もしないところで年のあまり違わない子たちが、「朝になったので、窓を開けますよ。」というこの絵本の主旋律とも言える言葉を発し、窓を開けた後見えてくる光景に感動し、だから「ぼく（わたし）はここがすき」と言える場を次々に紹介してきたのである。しかし、これらの三つの場を見せることが、語り手の目的ではない。語り手の目的は、あくまで聞いている子どもたち一人一人が朝、起きてみた時、自分自身でも家の窓を開けてみようとするにあらう。それを露骨に言わずに、語り手の気になることとしてさりげなく言ったのが、「きみのまちは はれてるかな？」だったのである。こう話し言葉で声をかけられると、幼児達も、それまで全く気にならなかつたとしても、ぼく（わたし）たちの町は、晴れているかどうか、少し確かめたくなるきっかけにはなる。ここでは、このきっかけができれば十分なのである。

こうして列挙してみると、あまり明確に打ち出されているわけではないが、山すそで朝窓を開けたところも、町のビルの最上階で窓を開けたところも、川下の二階建ての部屋の窓を開けたところも、場所はみな日本だったかもしれない。どこが日本か説明しにくいのであるが、聞き手に驚きがあつて、しかも自身とも接点を持って考えられるのは、同じ日本に住んでいると思えた方が身近でよいのではと思えたからである。ただし、河口の景色については、日本ではないかも知れない。これについては、他のご意見があれば、教えていただきたい。なお、聞き手が日本に住んでいればよいので、日本人かどうかは、問うていない。

三 第二部（第五場面から第八場面まで）における展開

1 南洋の暖かなところで、男の子が窓を開けて外の景色を眺め、ここが好きな理由を確かめる（16-19ページ）

景色は一変して、周りにジャングルと云つてよいような色鮮やかな大きな花や果物、植物が茂っている。目を奪うようなものばかりである。一見して、違ったところに来たと感じられる光景である。浜辺の近くでもあり、家は平坦なところにあり、屋根の色も赤く壁の色も明るく開放的である。あまりに植物が画面の上から下まで所狭しと繁茂しており、山などはあるのかどうかわからない。鬱蒼としており、島の原型がどうなっているか、予想もつかない。浜辺への道が切り開かれており、その間からやっとそこにある家がある程度見渡せるだけである。こういう場所にある家でも、男の子が窓を上を開けて、真つすぐに前を見ている。この見開き一面にも、「あさになったのでまどをあけますよ」と記されている。この地域においても、朝になったので窓を開けて、新鮮な外気を吸いたくなる気持ちは共通なのであろう。

次の見開きでは、道の先にある程度浜辺があり、そこから海が広がっている。海は浅瀬に海藻があるらしく青緑色が続いているが、それより沖は遠浅なのか、空色になっている。海の右向こうにも左向こうにも、なだらかな島の一部が見える。その間には水平線が続いている。この場面で半ばを占める空には白雲が広がり、青空ものぞいている。しかし、一番近くの雲は少し暗く、浜辺には雨も降りだしている。そうすると、ここにある通り、「はれているのに あめがふっている」という状況になる。不思議であるが、このようなことは、この地域に独特な現象らしい。そうだとわかると、「やっぱり ぼくは ここがすき」という気持ちが、いっそう湧くのであろう。浜辺にも、手前の右と左に、濃い緑が茂り、赤い花、白い花が少しついて、ジャングルがここまで続いていることを示している。

2 西洋の窓を開ける場所も高くて女の子が椅子に乗り、窓の大きさもあきれるほど大きい部屋から外を眺め、さらにそこから見えるお気に入りの木の下に場所を移して、ここが好きと言う(20-23ページ)

前の第五場面から、出てくる子どもたちに暮らす場所が日本に限られなくなったように見えたが、この第六場面でも、天井の高さからも、窓の高さからも、あか抜けており、がっしりとしていて、西洋の一角ではないかと思われる。内装も赤を基調にしながらも落ち着きもあり、本棚も壺も何十年も置かれてきたという重厚性がある。テーブルに用意されたパンもはちみつもジャムも、毎日必ず置かれているような安定感がある。とは言え、これまでのようにどういう建物の何階の窓が開けられているのかは、判然としない。開け放した窓から、青い空も見えている。しかし、その下は、山肌が見えているのか、岩があるのか、全体的に白っぽい色、もしくは黄色い色が用いられている。この窓際に椅子を持ってきて、茶色い髪の小さな女の子が、「あさになったのでまどをあけますよ」と言い、実際に行動に移した場面であろう。窓枠が大きいので、入ってくる風も多量であろうが、女の子にはいつものことのように、落ち着いて風を受けている。

次のページを開くと、見渡せるところの中央部が谷間なのかドーンと低くなって、砂漠状態になっており、草も一部にしか生えていない。そこ以外は、谷の高くなったところで、手前にもヤシの木を囲んで枠で囲った場所があり、そこに敷物を敷いて、女の子が絵本を読んでいる。持ち運びに便利な机・椅子のほかスタンドのようなものも用意されており、周到にそろえられている。実際には保護者が手伝ってくれなければ整うまいが、車が止まっている気配はない。熊かなにかの縫いぐるみも横におり、この子の部屋として使わせてくれているようである。それで、この場面では、「きょうは だいすきなきのしたがわたしのへや/いつもかぜがふいてきて/やっぱり わたしはここがすき」と言っている。谷の上部には緑があり、学校やがっしりした建物も並んでいるが、ヤシの木があるところは、それとは別のこの子の今日だけの部屋なのであろう。そう言って、何度となく木の下に来て遊んでいるようである。これまでは窓を開ける→そこから見える家・建物が好きと言う例ばかりであったが、そこから見える場所が好きであれば、行けるところなら当然行って楽しむこともあるわけである。むしろこういうここが好きと言える場があればあるだけ、大人も子供も自己の居場所が確保されることになろうか。この場では、青空は雲一つなく澄みきっていて、女の子が木の下で快く風に吹かれるのを見守っているかのようである。

3 文面はこれまでと同じようであるが、発言している語り手は、姿を見せず、朝焼けに包まれた二つの連続する光景だけが描かれる(24-27ページ)

第二部の第五場面・第六場面に至って、国・地域も場所も限定されず、「ここがすき」と言うところも、住んでいるところばかりかそこから見えるところ・楽しめるところに拡大されたが、この第七場面に至って、誰が言っているのかも絵には表されなくなる。確かに「あさになったのでまどをあけますよ」という文面は、これまでと同じ文面なのであるが、第五場面までのように家の外からも表されず、第六場面のように部屋の中からも表されない。したがって、「あさになったのでまどをあけますよ」と言われても、どこに語り手の家があり、どの窓を開けているのかも、はっきりしない。ただ、描かれた朝焼けの光が当たりだした畑を正面に据え、川が水しぶきを上げて流れる橋の上をバイクが走る。その姿が風のあるため池の水面にも映るが、もちろん目をとめるものはだれもない。また、小山を隔てた道路には、朝早くからバスが通っている。誰も声も出さずに黙々と進んでいく。しかし、バスの運転手にも、何人かの乗客にも、先に記したバイクを操縦する人にも、朝焼けが向こうの山から当たり出し、今こちらの畑にあたってきつつあることは言わず語らずのうちに共有されており、さらに山手の方にも朝日が当たるようになることに幾分高揚感を覚えつつも、「さあ、朝になった。きょうが始まる。」と、心のうちに今からのことに思いをはせることになろうか。この光に満ちた時間の美しさは、かけがえのないもので、生きていることへの感謝にもつながるものであろう。

続く見開きは、朝焼けが海に及んでいるところから見ると、前の見開きの山の後ろに少し見えていた海の右手に目を移したものと言えよう。それも左手に岬の先端部が少し見え、他方、画面の下に山の一部(てっぺん付近にある緑の木々の間に道路があり、電信柱も二本見える。一、二軒家もある。)がある以外は、下三分の一が一面の海、上三分の二が空である。空にはかなり厚い雲があるが、左手は朝焼けで黄色く見えて

いる。右手には、雲が少なくなり青空が大部分を占めるようになる。海と空の間には右手に平べったい島があるだけで、ほとんど水平線が画面を横に貫いている。ここでも、強い光に照らされて誰もが見とれてしまいそうな景色である。その光の中に、「うみはやっぱりそこにいる/そらはやっぱりそこにある/だからぼくはここが好き」と書かれている。語り手は、やはり陸地の方において、山は見慣れているのであろう。そこで、最終的に憧れるのが海と空になるのである。振り返ってみれば、海も空も今まで一度も挙げていなかったものである。光の美しさに照らされて、最も映えるのがこの二つなのであろう。

4 再び絵本の聞き手に「君の町は 晴れているかな?」と尋ねる (28-29ページ)

第二部に至って、南洋の朝においても、西洋の朝においても、また語り手自身としか考えられない人の朝においても窓を開け、「ここが好き」と言う光景を紹介してきた語り手は、絵本の聞き手たち一人一人に、二度目の問いかけをする。「きみのまちは 晴れているかな?」と。ここでも少し山に入ったところに、お寺の屋根が見え、やはり日本にいる子どもたちに話しかけていることが明らかである。見開きの絵は今度は右手の山が高く、田園が広がる右手前から左に、川が水しぶきをあげて勢いよく流れてくるほかは、田んぼの向こう側を車が一台通るだけである。向こうの山にははっきり日が当たり、右手の山にも日が当たり始めているのに、まだ町全体が眠っているかのようである。風景は違っても、「こういう状況にあるのなら、よけいに君もぼくの町、私の町が晴れているかどうか、確かめたくなるよね。」と、言わんばかりである。「川の水がこんなにも勢いよく流れているのに、見る余地もないなんて、もったいないよ。」とも思っていよう。外国の事例も紹介し、語り手自身のおき朝の光景も見せただけに、ぜひ語り手に「窓を開けてみたよ。ぼく(わたし)のところも、確かに晴れていたよ。」と言えるようにしたいのであろう。

四 結び (30-32ページ)

1 最後の「あさになったので」「まどをあけますよ」の場面

最後の繰り返し「あさになったので」とだけある見開き一面では、もうひとりひとりの視点から離れ、あたりが朝の明るさで白くなり、都会の高いビルが立ち並び、その間を縫って乗り物があっちにもこっちにも行き来し、商店街が軒を並べぎゅうぎゅう詰めの大都市が描かれる。ただし、確かに人は商店街にはまあまあいるし、プラットフォームにも二、三人の姿が見えるが、人が多くて困っているのか、いそいそ足早に歩くこと、様々な音に囲まれていることに違和感を覚えているのかどうかは、まだわからない。商店街のアーケードには、「市場」という文字が見え、「鮮魚」「ラーメン」などの看板も見える。「医院」や屋号、会社のマーク、ビル名なども挙がっている。こう見てくると、人間の色合いが失われた景色とも言えないのである。都会の朝はこの時から始まるというように、きちんと区切られるようなものではない。それでも、空はやはり白み、ビル群は後方に少し見える。広い海に包まれていることが重要であろう。これだけ人間の作り出したものが圧倒的に多い都会でも緑がないわけではなく、空と海とを合わせれば、見開き一面の三分の一程度は、自然が占めているのである。そうだとすると、最後はどんな光景で締めくくられるか。幼児も期待して終わりの場面を待つことになるだろう。

すると、次の面は「まどをあけますよ」の言葉通り、カーテンの向こうには、海が建物の間近まで迫り、空には穏やかに白い雲が浮かんでいる。おまけに朝焼けの明るさがまだ空や雲に残り、前ページでは気づかなかった、高さのあまりない島までが、右手からかなり大きく視野に入ってきている。誰の部屋の窓から見たにしても、「ああ、こんな景色に出会えてよかった。」と思えるものである。語り手は、先に自らどこに住んでいるのかを秘めて、聞き手にこんな朝の景色に出会いたいと思える場に連れていってくれたのであったが、この結びの場面では、「町にあっても、朝窓を開けてこんな光景に出会えるといいですね。」と思える一典型を提示したのである。それは、第二部の第六場面で語り手自身が示した畑や海に光が差す田舎の場面とは違う。しかし、そこで語られた「うみはやっぱりそこにいる/そらはやっぱりそこにある」と言う海と空は、しっかり最後の場面にもあり、有終の美を作り上げているのである。

2 裏表紙において

表表紙の三つの鉢から黄色や赤や桃色が流れ出したように見えることはすでに記した。それと連動するかのように裏表紙にも水車でもあるのか、黄色や桃色、青が道に流れ出し、おまけにオレンジ色のボールまで転がってきたようである。それに気づいた柴犬が駆けだしてきて吠えている。飼い主などもあるようであるが、穏やかな朝に起こった唯一のハプニングなので、後ろから見守っているところであろう。さわやかな色や光に満ちた世界であるため、怒ってもいられないような場面であろう。犬が真正面を向いて吠えた後、舌を出しているのも、ご愛嬌といったところであろうか。この場面も、題「あさになったのでまどをあけますよ」にまつわる朝の声として付け加えられているようである。

五 『あさになったのでまどをあけますよ』の構成

表表紙・中表紙を除けば、以下の三部構成になる。

第一部 日本のおさまな所で朝を迎えた子が自分の住んでいるところで窓を開け、そこから見える物事を喜び、語り手が絵本の読み聞かせを聞くひとりひとりに君の町が晴れているかどうかを尋ねる。

第一場面 (2-5ページ) 深い緑の山の裾に住む男の子が、喜んで開き窓をあけ、目に見える向こうの山がいつもと同じように遠くにあり、手近に大きな木が立っていることを確かめ、だからここが好きと口に出す。

第二場面 (6-9ページ) 町の高いビルの最上階に住む女の子が、同じように朝になったので窓を開けると宣言してカーテンまでくり、町がいつも通りににぎやかで、みんなが予想通り急いでいるのが好きなのだと言う。

第三場面 (10-13ページ) 大きな河口近くに住む双子の兄弟が、そろって二階の窓を開け、家の前の道に続く川べりの風景を一望して、川が水辺の町や雲・空まで映していつものようにゆったりと流れており、大河の中では、こちらに見えようが見えまいが、魚がきつとはねているのが好きなのだと言う。

第四場面 (14-15ページ) 高い緑の濃い山のふもとに広がる町を想像して、「君の町は晴れているかな?」と聞き手ひとりひとりに尋ねかける。

第二部 世界のあちこちで、朝になったので窓を開ける子どもを思い浮かべ、それぞれの子は、その地域のどういうところが好きなのかまで想像した上で、語り手が朝どこにいて、どういう窓を開けようとしているかを明示せずに朝焼けに輝く畑、海、空を見せ、海が確かにそこにいて、空が確かにそこにあるから、僕はここが好きなのだと言う。そして、改めて聞き手ひとりひとりにまだほとんど起きていない町を見せ、「君の町は晴れているかな?」とゆさぶる。

第五場面 (16-19ページ) 南洋の植物が鬱蒼としかも色鮮やかに生い茂る家の窓を上を開ける男の子を思い浮かべると、家から浜辺に通じる道の先に見える海や浜辺、密林に雲の多い空から落ちてくる雨が最もこころしいと思い、やはり晴れているのに雨が降ることが好きと言うに違いないと思えてくる。

第六場面 (20-23ページ) 西洋では室内の調度品などにこったものが多いし、天井も高く窓も広くとつてあるため、子どもが窓を開け、外を眺めるのによほど苦労すると推察される。そのため、女の子がわざわざ椅子を持ってきてその上に飛び乗って外を眺める場面を想定する。そして、住んでいるところが好きと言うのを一変させて、大好きな木の下を私の部屋にしてくつろぐと、いつも風が吹いてきて、ここが好きと思えるのだと言う。

第七場面 (24-27ページ) 「朝になったので窓を開けますよ」と言う語りはそのままだが、朝になって誰がどんな思いで起きたのかも、どんな家の窓が開けられたのかも出てこない。それで、ここでは語り手自身がどんなところから見ているかも、絵として掲げずに、窓を開けたものと想定して、最も心に刻まれた光景を見開き二面を費やして描いたものになっている。語り手は、作者がどのようにでも設定できるものであり、光に満ちた田畑の風景、そこから降りて海と空とが大部分を占める光景が眼前に開けてくる。これに、語り手の感嘆の声が記され、「だからぼくはここが好き」と述べられる。絵本の中でも、とりわけ心をこめて書かれたところと言えよう。

第八場面 (28-29ページ) 第四場面とは違って、なだらかに朝焼けに色づいた向こうの山から、光が手

前の山に移り始めたところで、これから町も起き始めるという瞬間の光景を描いて、「君の町は晴れているかな?」と改めて問う。

第三部 語り手の「朝になったので窓を開けますよ」という最後の促し（第一部も第二部も「きみのまちは晴れているかな?」と言う問いで終わっているため、答えを促す契機が最後に必要になる。それがこの部分なのである。語り手の「朝になったので、窓を開けますよ」に触発されて、この通りに窓を開けてみると、滞った空気の中にいるのとは違って、新鮮な風が入ってくる。そればかりか、見えてくる光景をじっくり眺め、愛着を覚える端緒になる。）

この絵本の考察をまとめれば、場面構成は上記のようになろうが、読み聞かせの際には、最初に表表紙・中表紙の題が読み上げられるため、聞き手である幼児には、第一部に「あさになったのでまどをあけますよ」という言葉が投げかけられているもののように思えて、前後が同じ言葉で始まり、同じ言葉で結ばれる絵本のように印象付けられるかもしれない。また、日本や世界各地の子どもが、朝になって窓を開けて語る言葉に鍵括弧がつけられていないことに、語り聞かせる側の配慮が不可欠になろう。本文に入って最初の山すそに住む男の子が声を発する場面でも、本来語り手が言っているのであるが、よく考えると、山すそに住む男の子の代弁だとわかってくるということなのである。そうすると、各場面で次々に新しい登場人物の声色を使って読むなどという努力をするよりも、語り手が代わりに読んだ元の言葉は、「ぼく」と言っているから、ここに住む男の子がそう思っているんだなあ、少しずつ遅れてわかっていけば大丈夫なのである。

六 本絵本の意図

絵本『あさになったのでまどをあけますよ』の視点、絵や文章から読み取れること、考えられる場面構成は以上であるが、問題はそれにつぎののかどうかである、『絵本で出会った子どもたち—心が育つ瞬間〈とき〉をみつめて—』〈注1〉の中で、足立茂美氏は「この絵本がとても大切なメッセージを発していると思いつつも、明確な言葉にすることができずにい」たが、詩人長田弘氏の著書『なつかしい時間』（岩波新書）を読んで、「やっとその答えを見つけることができ」た〈注2〉として、以下のように引用された上で、最後に意見を集約してまとめられている。

①「わたしたちは風景のなかで生き、そして暮らしています。景勝・絶景といった特別な風景でなく、(中略)わたしたちの日常の風景のことです。わたしたちの生活の目印、ひいては人生の目印となっているのは、そうした日常の風景です。(中略)たとえば自分ではそうと思っていなくとも、じつは風景のなかで感じ、思い、考えるということが、わたしたちの日々の生き方の姿勢を作っています。」(「大切な風景」一九九六年一月九日)

②「人の価値観を育むもの、支えるもの、確かにするものとしての風景のなかに身を置くということが、風景のひろがりのなかでじぶんの小ささを思い知るということが、いつか見失われてしまっているために、人間がひどく尊大になってしまっている。そのことの危うさを、いつも考えます。」(「風景という価値観」二〇〇四年九月九日)

風景が生き方の姿勢をつくっているという長田さんの考えに触れて、絵本『あさになったのでまどをあけますよ』に込められているメッセージが、私の中で明確な言葉になった気がしました。そして、長田さんが危うさを感じる今の時代にあって、「やっぱりここが好き」と思えるような風景の中で、子どもたちが育っていくことの大切さにも気づかされました。〈注3〉

③この絵本の中の子どもたちは、朝、窓を開けて、いつも見慣れた風景を見て、「やっぱりここが好き」と思います。詩人の長田弘さんは、そのような見慣れた日常の風景こそが、私たちの人生の目印となって、価値観を育み、支え、確かなものにするのだと言っています。それは具体的にはどういうことなのでしょう。

かつて長田さんは、北米大陸のほとんど全部の州を自分で車を運転して走り続ける旅を重ねるなかで、旅の喜びというのは、自分にとっての〈喜ばしい風景〉の発見に他ならないと気づいたそうです。そして、『アメリカの六一の風景』（みすず書房）という本を書き上げるあいだ、長田さんの胸にずっとあったのは、『草の葉』の詩人ホイットマンの、「戸外にでかけていった一人の子どもがいた」という詩でした。

毎日、戸外へでかけていった一人の子どもがいた。

そしてその日、最初に目にしたものを、子どもはじっと見つめた。

すると子どもは、じぶんがじっと見つめたものになった。

そしてその日中、あるいは、その日しばらくのあいだ、

いや、何年ものあいだ、いや、ひろがりめぐりゆく歳月をとおしてずっと、

子どもがじっと見つめたものは、その子どもの一部になっていった。

この詩の中の子どものように、子どもたちは、風景をじっと見つめることで、自分がこの世界の一部であるということを学んでいくのだと、長田さんは言います。そのように馴染んだ風景が、自分にとっての〈喜ばしい風景〉になっていくのでしょうか。〈注4〉

④(長田弘氏の本から連想される文章)私はふと、以前に読んだ、陶芸家河井寛次郎の「過ぎ去った今」という文章(新装版『規範国語読本』新学社 所収)を思い出しました。河井寛次郎は安来の生まれで、少年時代に親しんだ故郷の風景について、「中海と宍道湖のみがきのかかった床の間に秀麗な大山〈だいせん〉の大幅(大きな掛け軸)のかかった座敷。こんな座敷で出雲の子どもたちは育った」と述懐し、「子どもたちはくり返しくり返し見たものの中に、知らず知らずの間に、自分自身をはっきりこさえていくことができた」と言っています。「過ぎ去った今」という題は、過ぎ去ったものは無くなるのではなく、今の自分の中に生きているという意味です。河井の陶芸家としてのすばらしい精神の根底に、出雲の少年時代にくり返し見聞きしたものが、生き生きと息づいていたことがわかります。

(下線部は引用者。)〈注5〉

⑤あらためて『あさになったのでまどをあけますよ』を読み直すと、子どもたちは、毎朝窓を開けて風景を眺め、「やっぱりここが好き」と思うのは、自分がその風景の一部であり、その風景が自分にとっての〈喜ばしい風景〉になっているからだとわかってきます。しかし現在はその〈喜ばしい風景〉が、開発や画一化の波によりどんどん失われてきていることを、長田さんは危惧しています。そう思ってこの絵本を読むと、絵本の中に描かれている〈喜ばしい風景〉の向こうから、この日常の見慣れた風景を失ってはいけないという、長田さんの警鐘が聞こえてくるような気がします。〈注6〉

ほとんど言うべきことは尽くされているように思われる。確かに喜ばしい風景というのは、見る主体とのかかわりがなければ存在できないものである。見る主体にとっては、この光景こそと思えることがその人らしさを作っているのである。とりわけ、そこに自己を育てる可能性を感じれば、余計に見える風景と自己との間に切っても切れない結びつきが生じよう。ホイットマンが言うように、「子どもがじっと見つめたものは、その子どもの一部にな」るのである。見るということは、人間にとっていつものことであるだけに、かえって自覚しづらい。ほとんど何を見ても、目の前の用事に意識を集中させるために忘れるようにしているのが現実であろう。そういう日々を送っている私たちに、朝になったので窓を開けるという日々の最初の行動をきちんとしようとする子どもの出現は、まぶしいほどである。また、窓から見えてきた景色を見て「私はここが好き」と明言する力強さは、羨ましい限りである。しかし、この絵本を書かれた方も、「こんなふうに言えると根っこのある人生になるでしょうね。」と願って書かれたというのがほんとうのところであろう。子どもが十分に寝て、あたりが明るくなり始めるとともに、窓を開けようとする子があちらにもこちらにもおり、そこから見える風景を見て、こういうものが見えるからこそここが好きと言えとなると、夢に近くなろう。それでも、保護者も、教育者も、こういう子を育てられればと願って、少しでも実現に近づけるように努めることはできる。こういう子育てにかかわるものの夢を絵本にしたものと言えよう。

なお、絵本の帯に「なにげない日々のくりかえしの中にある、たしかな希望、生きることの喜び」とある。私たちはほとんどの人が、毎日朝起きて何かに取り組み、夜寝て疲れをいやすということを繰り返しているのである。その出発点において、朝になった事に気づいて、窓を開けて新鮮な外気を家に迎え入れる、そして家から見える景色を見つめて、考えたり感じ直したりする。すると、確かに前日はどれほど打ちひしがれていようと、また一步を踏み出そうとする「たしかな希望」が湧いてくる。光景を見つめ直し、感じ直すと、自己ならではの独自性を探るきっかけを得ると、私の「生きる喜び」を見いだす足場が確固としてくる。お

およそ以上のようなことだと推察されて来よう。

〈注〉

- 1) 足立茂美著『絵本で出会った子どもたち—心が育つ瞬間〈とき〉をみつめて—』今井出版、2016年、全152ページ。
- 2) 同上書、72—73ページ。
- 3) 同上書、73ページ。
- 4) 同上書、74—75ページ。
- 5) 同上書、75ページ。
- 6) 同上。

Study of Development of a Picture Book-In the Case of “When Morning is coming, I will open the Window”

Shinsho MAEDA

Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

The purpose of this study makes the remark of the conversastion in a picture buuk clear whether acharacter says as a narrator says and is to clarity an intention of the constitution why a story develops in this way.